



稲作情報



JA秋田ふるさと 営農経済部 米穀課 ☎ 23-6556
 各営農センター
 金沢 ☎ 37-2124 大雄 ☎ 52-3665 横手 ☎ 32-8220 増田 ☎ 45-2035
 平鹿 ☎ 24-3110 十文字 ☎ 44-3101 大森 ☎ 26-4155 雄物川 ☎ 22-2266
 秋田県農業共済組合横手市支所 ☎ 32-4150
 農産課(農作・畑作・損防) ☎ 32-4404 家畜果樹園芸課(家畜・果樹・園芸) ☎ 32-4407
 建物農機具課(建物・農機具) ☎ 32-4119 収入保険課(収入保険) ☎ 32-4229
 秋田県平鹿地域振興局 農林部 農業振興普及課 ☎ 32-1805
 横手市農林部 農業振興課 ☎ 32-2112・32-2113

生育平年並みに 幼穂形成期のケイ酸施用と 根の活力を維持する水管理徹底を!

本年のあきたこまちは6月10日以降、気温・日照共に平年を上回り、日較差が大きくなったため、草丈・㎡あたりの茎数・葉数・葉色すべてにおいて平年以上になりました。田植えの早晚・植込本数・側条有無・地域によって生育量に圃場間格差がありますので、生育状況に応じた水管理・肥培管理を実施してください。

◆6月25日現在生育状況

		草丈 (cm)	㎡茎数 (本)	葉数 (葉)	葉色
あきたこまち 秋田県平鹿地域振興局 農業振興普及課調査	本年	37.7	373	8.9	43.3
	平年比	109%	113%	+0.5	100%
	前年比	100%	122%	+0.4	100%



1. 今後の管理

◆間断灌水から中干し終了へ

幼穂の発育と一穂粒数の確保には、幼穂形成期以降圃場の水分が適切に維持されていることが重要です。中干しは、**幼穂形成期前(あきたこまちで7月15日頃)までには終了するよう**にしてください。中干しした圃場の土表面は、酸化状態のため急に湛水すると根腐れの原因になりますので、間断灌水(湛水と落水を繰り返す水管理)とし、徐々に湛水管理に切り替えましょう。

おすすめ高温対策!

中干し終了後、液体ケイ酸加里肥料のドローンによる茎葉散布をオススメします。幼穂形成期のケイ酸施用は、高温障害(乳白・胴割れ)防止・稲体強化による倒伏軽減・病害抵抗効果、根の伸長促進による登熟促進(タンパク抑制)、割れ粒防止によるカメムシの吸汁軽減効果が期待できます。

資材名 **K S K 28 (ケイ酸28.0%、カリウム17.0%)**

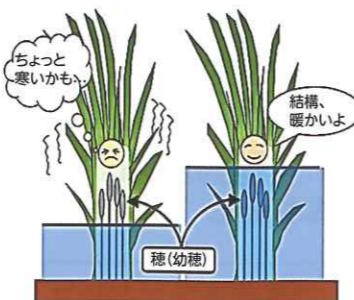
1.4kg入/10a用、4.2kg入/30a用、14kg入/1ha用

※ドローンによるK S K 28散布の希釈倍率は【2倍】です。ご注意ください。

◆幼穂形成期以降の水管理

幼穂形成期から穂ばらみ期にかけては低温に最も弱い時期となり、日平均気温20℃以下(最低気温17℃以下)の日が続き日照時間が少ない場合、障害不稔や白ふが発生することもあります。低温時には障害不稔の被害軽減のため、**幼穂形成期から穂ばらみ期にかけて10cm以上の深水**とし、幼穂を保護することが有効とされています。

また、近年出穂前後の高温で、収量や品質低下(乳白粒等の発生)の原因になっています。出穂後30℃以上の**高温が続く場合は飽水管理**(足くぼに水が溜まっていて土壌の湿潤が保たれている状態)や水の入れ替えを行い、根の機能減退を防ぐようにしましょう。



◆カドミウム吸収抑制

出穂前後3週間(7月15日～8月25日頃)は水田に常時水を張り、田面を空気に触れさせないことにより玄米へのカドミウム吸収を抑制します。…カドミウムを吸収させない湛水管理の実施

2. 病虫害防除

【いもち病対策】

気温が高めかつ雨が降りやすい天候はいもち病の発生リスクが高まります。圃場をよく観察し、本田での発病状況を確認してください。病斑が見られたらビーム剤の散布、予防する場合は、コラトップ剤やサンブラス剤を散布しましょう。

薬剤名	希釈倍数	使用量	成分数	使用方法
コラトップ粒剤12		1 kg/10 a	1	湛水散布 出穂30～5日前まで
サンブラス粒剤		3～4 kg/10 a	1	湛水散布 出穂5日前まで
ビーム粉剤DL		3～4 kg/10 a	1	散布 葉いもち発生時
ビームエイトゾル	1000倍	60～150 l/10 a	1	

【紋枯病対策】

紋枯病は、前年多発した圃場では発生が懸念されます。**出穂前防除**を実施しましょう。

薬剤名	使用量	成分数	使用方法
モンガリット粒剤	3～4 kg/10 a	1	湛水散布 予防・出穂20～10日前
モンセレン粉剤DL	3～4 kg/10 a	1	散布 発生時・出穂直前～穂揃期

モンガリット粒剤は、稲こうじ病にも効果あり。

3. 雑草対策

本年は比較的一発除草剤が効いておりますが、前年に多発した圃場では後発の雑草が多くみられます。ホタルイやノビエは斑点米カメムシの産卵・繁殖場所となりますので、殺虫剤による防除のみに頼らず適切に除草しましょう。

薬剤名	薬量(10a)	希釈水量(10a)	使用時期	使用方法	成分数	適用雑草
クリンチャーEW	100ml	25～100 l	ノビエ6葉期まで	落水散布	1	ノビエ
トドメMF乳剤	200ml	100 l	ノビエ7葉期まで	湛水、又は落水散布	1	
バサグラン粒剤	3～4 kg		収穫60日前まで	落水、又はごく浅水散布	1	広葉雑草
バサグラン液剤	500ml～700ml	70～100 l	収穫50日前まで	落水、又はごく浅水散布		
クリンチャーバスマE	1000ml	70～100 l	ノビエ5葉期まで	落水、又はごく浅水散布	2	ノビエ・広葉雑草
トドメバスマMF液剤	1000ml	70～100 l	ノビエ6葉期まで	落水、又はごく浅水散布	2	ノビエ・広葉雑草
バiscoop1キロ粒剤	1 kg		収穫45日前まで	湛水、又はごく浅水散布	2	広葉雑草
ワイドアタックSC	100ml	100 l	ノビエ6葉期まで	落水、又はごく浅水散布	1	ノビエ・広葉雑草

※クリンチャーEWは、展着剤加用で効果大(トドメ乳剤は展着剤使用不可)

※落水処理の場合、好天の続くときに使用すること(3日以上)

水の需要期ですので、地域の農業用水の状況を考慮し、大切に使いましょう。水回しの協力をお願いします。

4. カメムシ防除（密度抑制と本田防除をセットで実施！）

アカスジカスミカメ多数発生!!
草刈りと本田防除必須!!

6月下旬の農道等のカメムシ掬い取り調査で、アカスジカスミカメが数多く捕獲されました。今年の斑点米カメムシ発生量は多いと予想されています。畦畔や農道・転作田のイネ科雑草地でアカスジカスミカメが更に産卵・ふ化・増殖し、本田への侵入被害が懸念されますので、出穂（10～15日）前までに地域一斉防除・草刈りにより密度を下げることに、確実に本田防除を実施することが必須です。

時期	7月（密度抑制）			8月（本田防除期）		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
本田	残草処理対策を実施			出穂	1回目本田防除 出穂10日後頃	2回目本田防除 1回目の14日後頃
農道・畦畔 水路法面	出穂10日前までイネ科雑草が 穂をつける前に実施する ← 草刈り →			草刈禁止	カメムシ本田防除後 （1週間以内） ← 草刈り →	草刈禁止
休耕田等	← 薬剤防除・草刈り →			← ----- 草刈り禁止 ----- →		

5. 生育・栄養診断の実施

6月の水温上昇とガスわきによる下葉の黄化、葉色の低下が見られました。中干しによる酸素供給で、葉色が上昇しますので幼穂形成期に生育・栄養診断を実施し、出穂期まで健全な稲体に仕上げましょう。

※胴割粒の発生は出穂期の葉色低下が要因の一つですので、一発肥料にとらわれず栄養診断により適切な追肥を実施しましょう。

◆幼穂長の見極めから幼穂形成期（11.5葉期）を的確に把握する。

この時期の生育は、

■茎数の減少 ■葉色の低下 ■倒伏の診断

■一穂モミ数の減少 ■出穂期以降の登熟度向上

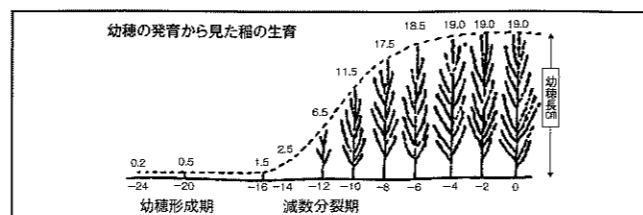
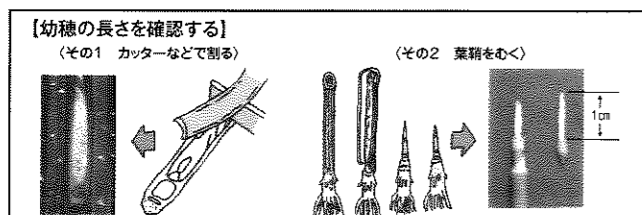
など、多くの要素を考慮しなければならず、生育期間中で最も重要な時期といえます。



1) 幼穂長を調べましょう！

平均的な株の一番背の高い茎を、根をつけたまま抜き取ります。葉鞘をていねいにむいて、幼穂の発育状況を見ます。株を束ねて一番葉の長い茎を引き抜き、茎の中央部をカッターで真っ二つに切ると簡単に見ることができます。

◎幼穂長が1～2mmになった時点で「幼穂形成期」となり、出穂25日前頃と出穂時期を予測することができます。幼穂長によって出穂日（期）を予測し、適期追肥やカメムシ対策（適期草刈り・防除）を計画的に進めていくことが重要となります。



2) 幼穂形成期を確認したら、「栄養診断」を実施しましょう！

あきたこまちの幼穂形成期の生育・栄養診断（平鹿地域版）

幼穂形成期（7月15日頃）

草丈を測る

62cm以上あるか？

ない → 倒伏の危険性が少ない

ある → 茎数を測る / 葉色を測る

25本/株以上あるか？（70株/坪の場合） / 葉色板で4.5以上あるか？（葉緑素計で38以上）

ない → 追肥の目安

ある → 倒伏危険 → 生育栄養診断をおこなう

追肥の目安 窒素成分量 (kg/10a)

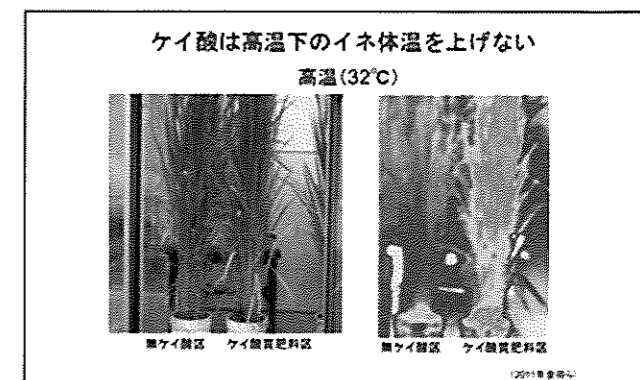
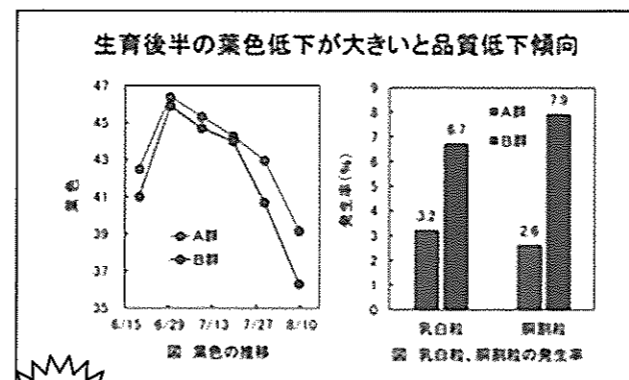
幼形期	減分期
1.0～1.5	1.5～2.0

生育指数を計算する。生育指数 = 草丈 × (茎数 × 栽植密度 ÷ 3.3)

生育量と葉色を利用して米毒診断をおこなう

穂肥の判定

生育型	倒伏の危険性	窒素追肥 (kg/10a)
栄養不足	少	2
籾数やや不足	↑	1～1.5
理想	なし	1.5～2
籾数やや多	↓	なし
葉色濃い	なし	1.5～2
生育過剰	なし	1.5～2
登熟不良	大	なし



重要ポイント

耐倒伏耐性・病害虫抵抗性を高め、高温登熟による「乳白粒」防止対策として有効な「幼穂形成期」のケイ酸追肥を必ず実施しましょう!!

「けい酸加里プレミアム34」や「シリカ未来」などのケイ酸肥料20～40kg/10a施用（湛水又は浅水管理）が目安です。

【農薬飛散（ドリフト）にご注意を！】

- ① 農薬を散布する際は、散布箇所周辺の住宅地や農作物への飛散に十分注意しましょう。
- ② 風が強い日の散布は控えましょう。また、散布途中で風が強くなった場合もすぐに散布を中止し、農薬による被害発生を未然に防ぎましょう。